

【論文】

昭和期台湾への大旅行調査と観光 —第 29 期生第 21 班の「南華・台湾への旅」の例—

愛知大学国際コミュニケーション学部准教授 岩田 晋典

はじめに

問題の背景

東亜同文書院生が卒業時に行った大旅行調査は苦難や危険に満ちた冒険の性格を強く帯びていた^①。『大旅行誌』におさめられた各調査日誌は、今なお若者の情熱を感じずにはいられない記述であふれている。

その一方で、大旅行調査が行われた 20 世紀前半は、交通機関の技術革新を通してツーリズムが世界規模で勃興していった時期でもあった。大日本帝国とその周辺地域でも同様に、内地から満洲・朝鮮半島・台湾への旅行が盛んだったし、植民地住民に内地を視察させる「内地観光」も行われていた^②。

本稿の目的は、こうした社会的背景を視野に入れて、大旅行調査を観光の側面から考察することにある。具体的には、台湾への大旅行調査の一つを取り上げて、同時代の観光メディアと比較対照することによって、大旅行調査と観光の関わりについて論じたい。

台湾を訪れた大旅行調査は一定数存在するが、本稿では第 29 期生・第 21 班が 1932 年に実施した調査の日誌「南支・臺灣の旅」を考察の対象とする。この日誌に焦点を当てるのは、台湾が主な調査対象地域であったことのほかに、同時期の観光メディアが利用しやすい状況にあり、比較分析を試みやすいと判断したためである。

以下では、第一に調査日誌「南支・臺灣の旅」の概要について述べ、第 21 班の旅行調査の特徴をまとめた上で、同時代の観光メディアとの比較を試みることにする。

なお、以下本文中では煩雑さを避けるために、「南支・臺灣の旅」からの引用については、たとえば (467) というように、ページ数のみ記している。また、本文で使用される旧字体については、明らかに誤植と分かるものも見受けられるが、できるかぎり本文のものを再現するよう心がけた。

2. 「南華・臺灣の旅」の調査旅行

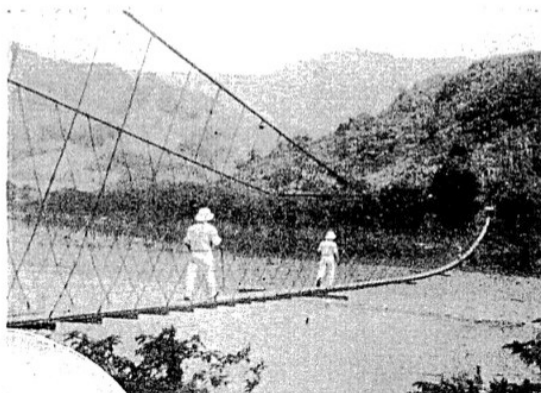
「南支・臺灣の旅」は、大旅行誌『北斗之光』に含まれている。『北斗之光』は、第 29 期生が 1932 年に実施した大旅行調査の調査日誌集として、1933 年（昭和 8 年）3 月に第 29 期生自らによって編纂されたもので、オンデマンド版大旅行誌シリーズ（東亜同文書院、2006）の第 24 巻に当たる。

『北斗之光』には合計で 24 の調査日誌が収められている。第 29 期生第 21 班による「南華・臺灣の旅」はその一つであるが、上海から南方に向かった日誌は同巻の中でこの一編

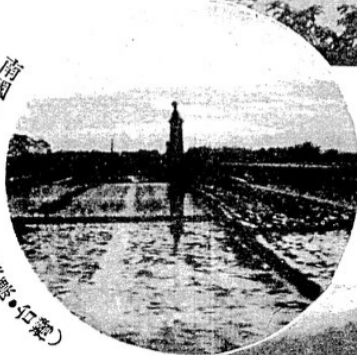
のみとなっている。それが理由かは不明であるが、「南華・臺灣の旅」は相対的にみて多くの分量を占めている。ページ数からすれば、『北斗之光』全 451 ページのほぼ 10%に当たる 46 ページとなっている。

写真についても同様である。他の大旅行誌とは異なり、『北斗之光』では巻頭に全調査の写真が一括して掲載されているが、写真用の全 24 ページの中で「南華・臺灣の旅」に関するものは 3 ページの割当となっている (図 1)。

(灣台)橋線鐵の山板角



南國に
しるす
(北回歸線
・江陵)



(舟木丸の人蕃灣台)ぶ浮に湖潭月日

図1 『北斗之光』に掲載された第 21 班の写真の一部

「南華・臺灣の旅」の執筆者「第 21 班」として名が記されているのは、中島有吉、稲垣信行、鹿島満周、枝村栄の 4 名である。中島と稲垣は、5 名からなる「大旅行籌備委員」のメンバーでもあったことが『北斗之光』巻末の写真から判る。ただし、編集委員には加わっていない。

第 29 期生が大旅行調査を実施した 1932 年は藤田が言う大旅行調査の「制約期」に当たる。この期間は、1931 年の満州事変をきっかけに、中華民国国民党政府からのサポート体制（ビザの発行や危険地帯での護兵の付添い）が崩れ、大旅行調査が限定されるようになった期間である（藤田、2011：67-68）。

「南華・臺灣の旅」には「豫備調査の日数が與へられなかった」（449）という記述があり、大旅行調査の企画段階に差し障りがあったことが伺える。第 21 班 4 名のうち 2 名が「大旅行籌備委員」のメンバーであったにもかかわらず予備調査が十分にできなかったという断りからは、満州事変、翌 1932 年の第一次上海事変ならびに満洲国建国という政治社会状況の変化の中で、第 21 班の大旅行調査準備作業において何らかの「制約期」を象徴する展開があったと想定することができる。

事実「南華・臺灣の旅」の中國大陸に関する箇所には、その時期に日本国民として同地域に滞在もしくは旅行することがけっして容易ではなく、むしろ緊張感の伴うものであったことが分かる記述が少なくない。

香港では、書院の先輩から「満洲事件及上海事件」が現地邦人社会に与えた悪影響について知り（419）、総領事館でも「南支一帶の抗日状況」について情報収集をしている（425）。また、「悪劣」な乗客がいる廣九鐵道で日本人が現地人に殺された事件についての記述もある（426）。廣東、汕頭、廈門の箇所でも「排日」や「抗日」の話題が繰り返される。

軍艦への言及も生々しいものを感じさせる。廣東では「江上に堂々と軍艦旗の翻つてゐる我日本の驅逐艦が見えて居留民は心強さを覚えるだらう」（428）とし、また廈門でも「海外にある者で軍艦の姿ほど力強く印象づけられるものはあるまい」（428）と語っている。

「南華・臺灣の旅」の大旅行調査は 6 月 7 日に始まるが、最終日がいつであったのかは、はっきりとした記述がないために不明である。台湾出国は以下で述べるように最短で 6 月 28 日と考えられる。かりに台湾滞在が 28 日に終わったと考えると、旅行全体の 21 日間のうち 7 日から 18 日までの前半が「南華」すなわち珠江デルタ（香港・広東港・マカオ）に、続く後半の 19 日から 28 日までが台湾島に当てられている。

以下、台湾滞在を最短で 28 日までとする計算について述べておこう。本文で最後に記載された日付は 6 月 26 日になっている。この日は草山温泉や本島人街を訪問している^③。本文ではその後に、角板山訪問の記述に移っており、「宿」（448）の字があることから、翌 27 日に角板山を訪れ、同地で少なくとも一泊したと考えてよい。

一方で、本文の「経路地」（後述）では台北後に基隆から出国するとなっている。他年度に台湾を訪問した班の中では、基隆を素通りする旅程は珍しくない。すなわち、基隆発の船舶の出港時間に合わせて鉄道で「一時間足らず」（台湾総督府交通局鉄道部、1930：67）の台北駅を出発し基隆市街に立ち寄らずに基隆港で乗船手続きに進むケース、あるいは逆に基隆港で下船後直ちに台北に移動するケースである。このように第 21 班が角板山から台北駅を通過し基隆市街を素通りしたとすれば、台湾出国は最短で 28 日と推測できる。

大旅行誌には、各班の調査日誌の冒頭ページに調査旅行の経過地リストと路線を示す小さな地図を掲載しているものが多いが、『北斗之光』では若干体裁が異なり、地図があるべき箇所は班員一同の写真が占めている。

「南華・臺灣の旅」の場合、経過地リストに記された地名と本文中に記された訪問地には若干の齟齬が見られる（表 1）。たとえば、「経過地」リストではマカオ（澳門）は廣東に

表1 「経過地」と実際の訪問地の比較

「経過地」	実際の訪問地
上海	上海
香港	香港
廣東	廣東
香港	香港
澳門	汕頭
高雄	廈門
猫鼻頭 (×)	高雄
台南	台南
嘉義	嘉義
阿里山	阿里山
日月潭	魚池 (○)
新竹 (×)	日月潭 (水社)
台北	台中 (○)
基隆	台北
門司	角板山 (○)
長崎	
上海	

注) 台湾以外は網掛けにしている。また、「訪問地」のうち「経過地」に記載がないものは(○)を、また「経過地」のうち実際には訪れなかったものは(×)を付けている。

行った後で香港（二度目の訪問）から向かうというスケジュールになっているが、本文の記述では最初の香港訪問時にマカオに足を伸ばしたという順序になっている。

また、台湾南端の岬・猫鼻頭については、本文では東側対岸の鵝鑾鼻として言及されたうえ、悪天候のために「憧の黒潮躍る帝國最南端」（434）の同岬の訪問を断念したとある。

さらに新竹は立ち寄ることすらせず、その代わりに日月潭から台北に行く途中で台中で数時間過ごしている。

こうしてみると、「南華・臺灣の旅」の冒頭に見られる「経過地」は実際に訪問した場所ではなく、おそらく調査実施前に計画したルートであり、訪問予定地をそのまま掲載したものと想定できる。

「経過地」にはない魚池・台中・角板山の三箇所のうち魚池と台中は宿泊のためだけに立ち寄っている。魚池は⁴⁾、日月潭のダム工事のために出来た「バラック」ばかりの小さな町である。彼らは集集線・水裏杭駅（現在の水里駅）からバスに乗り換え悪路を進んだ

末に、やっと午後8時にたどり着き、ダム工事労働者たちが飲み騒ぐ「お祭り気分」の中、「今宵一夜の假宿」として「魚池旅館」に宿泊している（442）。

台中での宿泊は、水社から午後7時に到着してから午前1時半発の台北行の列車に乗るまでの5時間程度の利用であった。駅で「大勢の客引が屋敷の入った提燈を高く差し上げて盛に自己宣傳をやりながら客の袂を捕へてみた」（445）という光景は、当時のツーリズムの充実ぶりが表れているようで興味深い。

角板山は、1930年の『台湾鉄道旅行案内』に「蕃情視察の最適地」とあるように（97）、第21班が台湾を訪れた頃にはすでに蕃社の見学地として著名な場所であった⁵⁾。同案内書には、角板山が手押し軌道で大溪街から約3時間でたどり着くこと、蕃童教育所や物品交易所、製茶工場、蕃人の耕作地などがあること、そして物品交易所では「珍奇な蕃産物」が廉価で購入可能であることなどの説明がある（97）。

3. 第21班の台湾旅行の特徴

第21班が訪問した主な場所を大別すると、高雄・台南、嘉義と阿里山、日月潭、そして台北とその周辺という四つの地域に分けることができる（表2）。

今日の台湾観光でも各地域はごく一般的な観光ゾーンであり、第21班と同じように旅行

表2 第21班の旅行内容

日付	主な行動内容	宿泊地	宿泊施設名
6月19日	高雄港に上陸。台湾の果物・数日ぶりの入浴・浴衣での散歩を楽しむ。	高雄	壽館
6月20日	屏東で製糖工場・公園・神社・蕃社を見学。夕方台南へ。	台南	(不明)
6月21日	安平でゼーランディア遺跡を、台南で神社・孔子廟・商品陳列館・赤崁楼を見学。夕方嘉義到着後市内散策。	嘉義	青柳旅館
6月22日	朝、阿里山鉄道で沼の平地区へ。一帯見学。	阿里山	阿里山倶楽部
6月23日	祝山登山。下山して沼の平見学。嘉義で製材工場・農事試験場を見学。二水・水裏杭経由で夜魚池へ。	魚池	魚池旅館
6月24日	バスで水社(日月潭)へ。独木舟・杵聲を楽しみ、蕃社を見学。涵碧樓で昼食。	水社	(涵碧樓?)
6月25日	午後3時に水社を出て夕方台中着。台中公園を見学。	台中	(客引きの旅館)
6月26日	午前1時に台中を出て台北へ。市内散策、総督府・博物館訪問。草山温泉・本島人街訪問。	台北	日の丸屋
(不明)	角板山へ。手押し台車を利用。製茶工場・マラリア治療所・蕃童教育所を訪問。	角板山	(現地の宿)

する人がいてもさして驚かない。そして、後述するように、各ゾーンは昭和初期の当時でも一般的なデスティネーションであった。

こうしたゾーンを訪問する中で第21班が関心を示した事柄を調査日誌の記述から探ると、近代的なもの、未開的なもの、南国的なもの、神社、旧跡の五つに分類することが出来る。

五つ目の旧跡をのぞいた前四者が全て備わっている好例として屏東の訪問を挙げることができる(434-436)。

高雄からの移動中に車窓から「すべてが南国らしい、魅惑的な景色」を堪能する。「鳳梨の罐詰で名高い鳳山」そして「東洋一を誇る下淡水溪の鐵橋」を通過し、檳榔樹と大榕樹が植えてある「如何にも南国の驛」である屏東駅に到着。そこで「全島屈指」の台湾製糖「阿緞工場」(ママ)を見学している⁶⁾。つづいて屏東公園・阿緞神社を見学し、パイワン族の蕃社を訪問している。

このように、工場や鉄橋、公園という近代的な技術・インフラ、その裏返しとしての蕃人、景色・果物が示す南国情緒、神社というきわめて日本的なものが順に記述されている。

以下、それぞれの要素について詳しく見てみよう。

1) 近代的な事物

まず、近代的なものへの関心である。高雄では港湾設備に言及し、屏東後に訪れた台南

では商品陳列館を訪問している。阿里山では製材作業や小学校について触れられ、麓の嘉義では製材工場、農事試験場を「あはただしく」(441)回っている。日月潭では当時建設中のダム・水力発電所の意義について語り、台北では博物館を訪問、また博物館前に展示された機関車を見てその「哀史」(446)に思いを馳せている。最後の訪問地である角板山では、三井製茶工場、マラリア治療所、蕃童教育所そして「東洋一」(448)の鐵線橋などの近代的なインフラストラクチャーを訪問している(図1)。

このように、屏東以外にも行く先々で工業技術や近代的な設備についての記述が見られる。

2) 蕃人・蕃社

蕃人に関する大旅行誌の記述では、近代的なものの裏返しとして蕃人を位置づける植民地主義的思考が普通に見られる。第21班の記述も例外ではない。蕃人あるいは蕃社への言及は阿里山や日月潭、角板山など平地以外の場所の記述に見られるが、ここでは角板山の記述の一部を引用しよう(全て原文ママ)。

蕃童に出會えば齒切れのいい日本語で「今日は」と丁寧に會釋して「何處へ行くの」と愛想よく聞く。多く日本服を着てゐるから内地の田舎の少年と見違へる位だつた。壯年や半白の老人に會へば肩から腰にかけて赤い布ををけシイザーブルタス、カシヤスのローマ武士を偲ばず勇壯輕快な扮装をしてゐるが、清楚の感じがないから何處となく野蠻人らしい香がする。妙齡の婦人は總て鼻髭の様な太い入墨をして獐猛な感じを與える點よき内助者たるを思はせる。外貌如何にも生蕃の本領を發揮して今にも食ひつかれさうだが總督の理蕃政策とく行き届いて、全く日人には馴れ、一行を見れば言葉こそ發せぬがニコニコとして頭を下げて通り過ぎる。

この引用部分には、蕃人にいまだ未開人的な部分が備わるということだけではなく、蕃人の日本化・文明化が順調に進展していることが描かれている。こうした描写は、観光地としての蕃社が、台湾にしか存在しないエキゾチックさを経験できるものであると同時に、植民地化・近代化の進展を認識する場でもあったことを示している。

3) “南国らしさ”

“南国らしさ”は、第21班の台湾イメージの大きな部分を占めていたようだ。高雄に着いた彼らは、「甚だ、むかつく税關検査」への不平と簡単な港の印象を述べた後で「私どもの台灣情緒は、先づ波止場の物賣り屋台に並べられた、黄色く熟した水々しい鳳梨から初まつた」(434)と記している。また、夕食後には「木瓜に南國の甘味を賞し」ている(434)。

台湾の“南国らしさ”はかなり印象深かつたらしく、すでに触れたように高雄から屏東までの移動の際に見た景色を、次のように詳しく描写している。

如何にも熱帶的に繁茂した濃緑が目映じて、至極心地よい。一面の水田にはよく實つた稻が重くるしくうな垂れて居たが、その中にははや、台灣特有の收穫法刈り入れられてゐたものも目についた。又こんもりした優雅な檳榔樹の森が、其處彼處に散在し、水田や小川のほ

とりには、数多の白鷺が深く物思ひに耽つた様で、其の麗しい姿を水面に映じてみた。水牛は静かに小沼に浴び、牧童は無心に列車の通過を眺め、バナナは青々と房をなし、木瓜は黄紅色に熟して、鳳梨がその青葉の中から橙色の果實を上げて畑に行列をなして居た。すべてが南国らしい、魅惑的な景色であつた。

また、北回帰線塔について本文では短く言及しているだけであるが、図1の写真ページには「南国にしるす（北回帰線標・台湾）」という写真が掲載されている。

しかしながら、“南国らしさ”はつねに楽園的なものとしてのみ描かれているというわけではなく、熱帯のネガティブな部分に触れる部分もわずかに見られる。高雄や嘉義ではヤモリに怖気づいている。また角板山では毒蛇・百歩蛇に噛まれて死んだ人の話も登場している⁽⁷⁾。

いずれにしても、こうした“南国”の記述はページが進むにしたがい、目立たなくなっていく。理由としては、阿里山や日月潭という高地に移動したからとも考えられるし、また、もしこの調査日誌が現場で記していたフィールドノートに忠実に沿ったものであるのなら、日が経つにつれて“南国らしさ”に慣れていったからと考えることもできよう。

「南華・臺灣の旅」の最後の節は、「南国のカクテル」というタイトルで全体をまとめる部分になっている。第21班は「カクテル」という言葉に、「回想する毎に総合的美酒の味覺に陶然とする、酔へば羽化登仙し醒むれば悲哀を感じず」という意味が込めている。そうしてみると、第21班が言う「南国」には珠江デルタも含まれていたと理解できるのであるが、記述全体を捉えると、台湾の箇所では記述されるような“南国らしさ”は珠江デルタでは語られていないのも事実である。また、この“南国らしさ”に、その自然環境に暮らしてきた人々、つまり本島人が一切関わっていないことも指摘しておかなければならない。

4) 神社

第21班は、阿緱神社、台南神社、阿里山神社というように各所で神社を参拝している。神社は、台湾を訪れた書院生にとってごく普通の訪問場所であつた。たとえば北投温泉と台湾神社は台北中心部から同じ方面に位置し、鉄道を利用して簡単に往來することができたので、書院生らはセットのようにして出向いていた。第21班の記録に台湾神社訪問の記述がないのは、彼らが草山温泉に行ったからなのかもしれない。ただし方角としては草山温泉も北投温泉と同じ台北北部にある。

神社参拝が普通の旅行行動であつたことを念頭に置くと、記述はないとしても台中神社にも行っていた可能性も否定できない。台中ではわずかな滞在時間の間に台中公園を見学し、その「雄大さ」に感銘を受けているが、台中神社はその台中公園の中心部に建てられていた。

5) 旧跡

第21班の旧跡見学は台南に限られている。そのためか台南訪問の節も「台湾の京都見物」というタイトルになっている。

台南州庁に自動車と案内役を提供してもらった一行は、安平のゼーランディア城跡を訪れているが、寂しい印象ばかり残ったようだ。

寂れゆく安平市街を城下に、空しく往時を夢みる安平港を一望の内におさめて、小高い廃墟が残っていた。そこに獨り立つ白亜の燈台にも又一入の寂寥が感ぜられる。(436)

赤崁楼では、さらにその度合が増す記述となる。

安平城址と同様由緒をもつ、プロヴィデンジャ城の舊址であるが、鄭成功清朝と時代は遷り、幾度となく重修されたためか、今はただ荒寥たる、純支那式の二樓閣を残すのみであった。往時蘭人經營の跡空しい濱田彌兵衛鄭成功の勇躍も又空しく偲ばれるのみ。(437)

ここで使われる「純支那式」という言葉が興味深い。この嘆きにも似た思いが、旧跡が修復され続けて昔の姿を失った状態に向けられているのか、あるいは「純支那式」に変化したことに向けられているのか、この記述だけでは判断しがたい。とはいえ、次に述べる本島人とその文化の取扱いも考慮にいれると、この文脈で用いられる「支那」という言葉に、ネガティブなニュアンスが込められていたと考えることも十分に可能である。

6) 本島人とその文化の不在

最後に、本島人の取扱いについて述べておきたい。「南華・臺灣の旅」において本島人とその文化についての記述は限定されたものになっている。

たとえば第 21 班は前述の台南滞在で孔子廟も訪問しているが、残された記述は「禮樂庫に藏されてゐる古ぼけた樂器を參觀して廟を辭す」(437) というわずか一文である。

後述するように、「本島人街」を訪れているにもかかわらず、その部分にも廟についての記述が無い。植民地台湾では、廟の数は神社の数を凌駕し、廟の参拝が活発に行われていた。1920年代は台湾人大衆層に余暇を楽しむ余裕が生まれており、1921年の旧正月には媽祖信仰の中心・北港朝天宮を参拝する客のために台北嘉義間で臨時列車が運行されたくらいであった(曾山、2003: 112-115)。

それを考慮にいれると、第 21 班の記録に現れた廟が台南・孔子廟のみであり、記述もわずかなものであったという事実は、彼らの意識がそもそも本島人の生活文化に向かっていたと判断するのに十分なものであると言える。

当時の台湾の宿泊施設は、大きく分けて日本人向けの内地式と非日本人の植民地人向けの本島式の二種が存在していたが(ibid.: 291-295)、台湾を訪れた書院生はもっぱら内地式を利用していたようである。第 21 班についても本島式の旅館を利用した記録はない(表 2)。

そもそも本島人自体に関する記述には親近感を感じさせるものもほとんど無い。高雄上陸直前の部分では「(本島人に)特有の喧噪を以てごつた返すやうに騒ぎたててゐる」(433)の述べ、台中では恐れ混じりに「福建人の血を受けてゐる本島人の經濟的能力」(445)に言及している。

第 21 班は、草山温泉からの帰りに立ち寄った「本島人街」を次のように描写し、本島人の同化が困難である理由としている。

本島人街に来れば日本人町の清楚美麗なるに比し、上海の徐家匯であり北京路の延長である。店内に飾られてある商品は多くは日本品だが、また完全に舊習を脱することが出来ずに、福建省あたりから輸入された彼等の必需品が多くあつた。(446)

ここでいう「彼等の必需品」とは「習慣上必要なる品物」(447)すなわち信仰に関わる用具を指しているようだ。第21班の認識の中では、廟そしてそれを支える信仰は、同化の障害となる旧弊(あるいは悪弊)として位置していたと解釈している。

その証左なのであろうが、本島人の同化が進んでいる状態を贅えた部分もある。本島人街の前に訪れた草山温泉では、「和服を着た台湾人が流暢な日本語を操り日本人と仲よく話してゐる點など植民地に稀に見る麗はしい風景」(446)を描いている。

最終節「南國のカクテル」では「原住社會群の足らざるを補ふは文明社會移住羣の義務である」(450)と論じている。文脈から判断して、この「原住社會群」は本島人を指している。第21班の認識では、台湾において支那性を代表している本島人も、蕃人と同様、日本人より文明性が欠けた存在であった。そして、その欠落を象徴していたのが、信仰の保持であり、その具体的表れすなわち廟であった言えよう。

4. 同時代の観光メディアとの比較

前章までは、第21班の調査旅行の内容について論じてきた。本章では、それを同時代の内地発の観光メディアと比較対照してみたい。事例として、第21班の台湾調査旅行と同時期に販売されていた「臺灣遊覽券」のクーポン案内に焦点を当てる。

「臺灣遊覽券」は、1925年から鉄道省がジャパン・ツーリスト・ビューロー(現・JTB)を通して販売を開始した旅行クーポン・チケットである。台湾を対象とするものは、1931年から発売された。台湾在住者は利用不可である。遊覽券は好評を博したようで、1934年に出版された『台湾旅行の栞』という台湾旅行案内書では、台湾の鉄道について述べた章につづいて、独立した「臺灣遊覽券」という項目が設けられている。それによれば、遊覽券は発売以来「好果を収めてゐる」(ibid.: 94)もので、著者も「旅客にとつては眞に至便」(宮前、1934: 95)と推奨している。

日本旅行俱樂部発行の雑誌『旅』の1935年5月号には「クーポンの旅 臺灣遊覽」という計7ページの巻末付録(以下、クーポン案内)があり、遊覽券を用いた台湾旅行が宣伝されている(日本旅行俱樂部、1935)。

クーポン案内で「台湾クーポンコース」という地図とともに「臺灣の指定遊覽地巡り」の対象として紹介されている場所は紹介順に(ibid.: 2-7)、基隆、台北、北投温泉と草山付近、角板山、日月潭、阿里山、烏山頭、鵝鑾鼻、タロコ溪という9箇所となっている⁽⁸⁾。

表3 『旅』1935年5月号の台湾遊覧券案内で紹介された観光地

地名	項目として列挙された観光対象
基隆	高砂公園、千人塚、基隆神社、臺灣水産會社、クールバー濱、平和公園、社寮島
台北	臺灣神社、劍潭寺、交通局鐵道部、日本旅行協會案内所、龍山寺
北投温泉と草山附近	公共浴場、附近名所、草山温泉、竹子湖、淡水
角板山	(下位項目無しに同地を説明)
日月潭	石印化蕃の杵聲、新高山、霧社
阿里山	阿里山神社、阿里山寺、阿里山の神木、嘉義
烏山頭	(下位項目無しに同地を説明)
鵝鑾鼻	高雄、壽山、澎湖島、屏東、鵝鑾鼻、恒春、四重溪温泉
タロコ溪	礁溪温泉、宜蘭、花蓮港、大タロコ

これら9箇所の内容に含まれる下位項目も加えたのが表3である。この表と第21班の記録に見られる訪問地を照らし合わせてみると、書院生が訪れた場所の多くが遊覧券が対象とする範囲に含まれることが判る。

日月潭の箇所には、第21班も楽しんだ「杵聲」が含まれている。また、角板山の箇所では、台北からの蕃地見物に最適であることや、蕃童教育所や物品交易所、三井などの企業関連施設があることも紹介されている。

近代的な事物については、角板山の企業関連施設のほかに、各地の産業や鉄道が言及されている。とくに目を引くのは第21班が訪問していない烏山頭貯水池であるが、クーポン案内全体における産業観光の記述は、第21班の記述と比べると、むしろ控えめの印象を与える。東亜同文書院がビジネススクールであり、各代の大旅行調査のテーマも産業に関するものに特化していることからすれば、それを当然と捉える向きもあるかもしれない。

けれども少なくとも台湾に関して言えば、台湾の統治機構や事業、各種産業に関する事物、つまり植民地台湾の近代的な側面は、台湾総督府交通局鐵道部による『台湾鐵道旅行案内』などの旅行案内書でもごく普通に紹介されており、観光対象として大きな部分を占めていたことも無視できない⁹⁾。言うなれば、台湾における書院生の工場見学を一般の観光客の行動からかけはなれたオリジナリティのある旅行実践であるとは断言できないのだ。

クーポン案内の他の説明にも第21班の記述との共通点を示すものがある。たとえば、屏東の説明を見てみよう。

人口三萬九千の町、飛行第八聯隊の所在地で、駅から約一軒に臺灣製糖會社がある。此の間は椰子の並木續きである。此の外全街區を點綴する熱帯植物——榕樹、檳仔、龍眼等の老木が熱光の下に綠蔭を投げてゐる。此の町へ來ると熱帯に來た感が殊に深い。(6)

なお、この中の後半部分と酷似した文章は、1930年版『台湾鉄道旅行案内』の屏東驛の紹介文にも見られる。

衢區を點綴する榕樹、檳仔、龍眼等の老木の亭々として繁茂し、熱光の下に綠蔭を作つてゐる様は誠に爽快なものである。(台湾總督府交通局鐵道部 1930: 217-218)

先に引いたように、屏東に関する第21班の記述も南国らしさ、熱帯性を強調したものとなっている。実際に第21班がクーポン案内や『台湾鉄道旅行案内』を参考にして調査日誌を書いたかどうかは定かではない。そして、それは重要ではない。むしろここで肝要なのは、屏東を南国・熱帯の町と捉える解釈枠組みが存在し、それが旅行メディアと調査日誌に共通して見られるという事実である。

図2は、1935年10月号の雑誌『旅』に掲載された台湾旅行の広告である。南国台湾の自然と蕃人文化が強調されたものになっており、新高山、パイナップル(本文では「木瓜」)、水牛、杵歌など、調査日誌で台湾を示すものとして用いられている記号が散りばめられている。

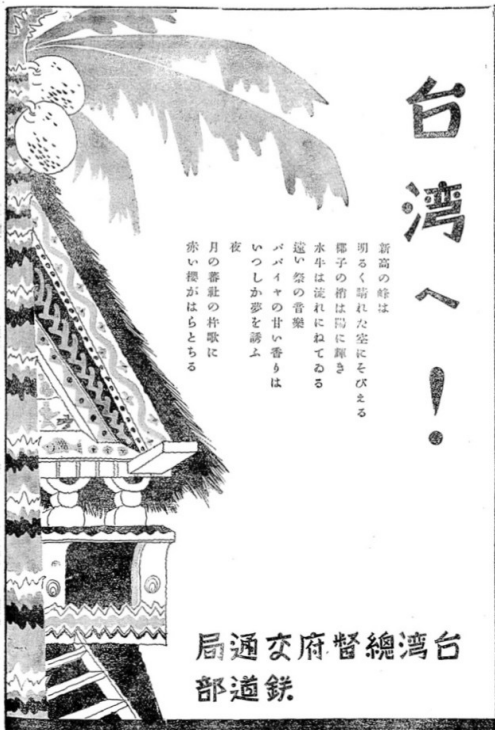


図2 雑誌『旅』(1935年10月号)の広告

第21班の調査旅行が当時のツーリズムに多かれ少なかれ規定されていたことは、阿里山の記述からも垣間見ることができる。以下は、クーポン案内で紹介された阿里山の旅程である。

阿里山遊覧者は午前八時五分嘉義驛を發し、車窓の展望に驚異の眼をみはりつつ午後二時四〇分阿里山驛に著(ママ)く。そのまま水上に到り、伐木、集材状況を見物して午後五時頃阿里山に引きかへして一泊、翌早朝旅館を出て約三軒の祝山に登り、指呼の裡にある新高主山連峰に對し、御來光を拜しまた引返し阿里山寺を參詣、九時五七分神木驛から乗車嘉義に降るのである。(5)

この旅程は第21班の行動と基本的に同じものである。当然ながら彼らの経験談はその時々感情や人々との出会いを含む個人的かつ具体的なものである。また、この旅程に

ある「水上」という地名が彼らの記述には現れない点など、細かい部分に相違が見られる。けれども、鉄道で阿里山山頂地域に到着、林業を見学し宿で一泊、翌早朝に祝山登山、下山後寺社を参拝し、鉄道で嘉義に戻るという行程自体は両者に共通している。阿里山観光がかなりの程度定型化しており、第21班もそれに則ったと考えるべきであろう。

第21班は、高雄での悪天候によって鵝鑾鼻と壽山の訪問を断念している。いずれも台湾

八景に数えられた名所である。名所訪問の断念をあえて記録するところにも、彼らの観光熱がけって冷めたものではなかったことが分かる。

このように、第 21 班の行動記録には、クーポン案内の紹介内容と共通するものが多々見られるのであるが、さらにもう一つの特徴として、本島人的なものの不在を指摘しておきたい。

先に第 21 班は廟の記述をほとんど残さなかったと書いた。その点クーポン案内も同様である。廟として唯一紹介されているのは、嘉義の呉鳳廟であり、呉鳳が蕃人に対して行った有名な逸話にも触れている。けれどもそこには、この廟を本島人がどのように信仰しているのかといった部分は一切ない。つまり、生活文化の例としてではなく、むしろ蕃人に関わる旧跡として紹介されていると解釈するのが妥当であろう。

廟以外では、劍潭寺、龍山寺、阿里山寺という三つの寺が紹介されている。劍潭寺と龍山寺は、台湾割譲以前から存在することが明記されているものの、単にクーポン利用者も利用しうる仏教施設・旧跡でもあるところという位置付けを与えられているようである。なお、阿里山寺は大正 8 年の建立である。

5. むすびにかえて

以上本稿では、第 29 期生・第 21 班による「南華・臺灣の旅」に焦点を当て、同時代の観光メディアと比較することで、大旅行調査と観光の関わりについて考察してきた。

第 21 班の書院生が記録した旅行の在り方と観光メディアが推奨する旅行の在り方の比較対照から分かったのは、両者に少なからずの類似性があるということである。たしかに、第 21 班の記録は実際の行動にもとづいている。けれども、それをテキスト化する実践を通じて浮かび上がる旅行像には、ツーリズム産業が大衆を旅行に誘うために活用する魅惑的言説と大きく重複する部分が見られる。端的に言えば、両者の間では、同時代的に構造化された「観光のまなざし」(アーリ、2014) が共有されていたのである。

このように、どこまで意識していたかは不明であるとしても、第 21 班も当時のポピュラーな台湾イメージに規定されていたと解釈できるのであるが、一方で、そうせざる得ない環境下に置かれていたとも考えるべきである。まとめの章「南國のカクテル」は「豫備調査の日数が與へられなかつた一行はフローテングモザイク的な漠然として無統一、そして浅薄な知識を抱き締め、南風に競ひつつ未知の香を求めて行脚した」(449) という一文から始まる。そして旅行全体を振り返り、植民地建設について論じた後、章の最後を「大名旅行から生まれる皮相の見解しか持ち得なかつたことを考へ合せて呉々も遺憾に思ひつつ擱筆する」として本文を締めくくっている。

こうしてみれば、好意的には次のような解釈も可能であろう。すなわち、第 21 班は当時の社会的制約の下で調査の準備がままならず、自分たち独自の旅行を遂行することができなかった、そのために大衆的な観光のメカニズムに絡み取られてしまったのだ、と。

この点に関して理解を深めるためには、他年度の台湾調査旅行だけではなく、台湾同様に内地からの観光旅行が頻繁に実施されていた朝鮮半島・満洲などへの調査旅行と比較分析していく必要があるだろう。ただし、そもそも調査旅行と観光を切り離すことが適切ではない可能性にも言及しておきたい。第 21 班は安易に物味遊山の観光旅行をしてしまったとい

う見方もできるのかもしれないが、たとえば香港をおとずれた書院生の多く（第 21 班も含む）がビクトリア・ピークを訪問しているのも事実なのである。仕事や学問を目的にしたどんな種類の旅行にも多かれ少なかれ観光的な行動が含まれていることを念頭に置きながら書院生の大旅行調査を読み解くことで、より多角的に大旅行調査を理解することが可能になるのではなかろうか。

参考文献

- 阿部純一郎（2014）『＜移動＞と＜比較＞の日本帝国史：統治技術としての観光・博覧会・フィールドワーク』新曜社
- アーリ、ジョン（2014）『観光のまなざし』（加太宏邦訳）法政大学出版局
- 有山輝雄（2002）『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館
- 片倉佳史（2015）『古写真が語る台湾：日本統治時代の 50 年』祥伝社
- 曾山毅（2003）『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社
- 東亜同文書院（編）（2006）『東亜同文書院大旅行誌』シリーズ（雄松堂オンデマンド）
- 台湾総督府交通局鉄道部（1930）『台湾鉄道旅行案内』（2013 年『近代台湾都市案内集成』第 4 巻、ゆまに書房）
- 日本旅行倶楽部（1935）『旅』（5 月号・10 月号）
- 藤田佳久（2011）『東亜同文言院生が記録した近代中国の地域像』ナカニシヤ出版
- 藤田佳久（2012）『日中に懸ける：東亜同文書院の群像』中日新聞社
- ルオフ、ケネス（2010）『紀元二千六百年：消費と観光のナショナルリズム』（木村剛久訳）朝日新聞出版
- 森正人（2010）『昭和旅行誌：雑誌「旅」を読む』中央公論社
- 宮前嘉久蔵（1934）『台湾旅行の栞』東亜旅行案内社

注

- ① たとえば（藤田、2012）が詳しい。
- ② 戦前の内地発の旅行については（有山、2002）や（ルオフ、2010）に詳しい。台湾については、本文で適宜引用しているように（曾山、2003）が参考になる。さらに、（片倉、2015）など片倉による一連の著作も、一般書であるとはいえ、示唆に富むものが少なくない。また、台湾への内地観光団については（阿部、2014）が詳しい。
- ③ この「本島人街」は、草山温泉から台北市への帰路に立ち寄ったと考えれば大稻埕地区と判断するのが妥当であろう。
- ④ 同じページで「漁池」とも表記している。
- ⑤ 本稿では、植民地主義という文脈を軽視しないように心がける目的で、台湾先住民に対してあえて「蕃人」という名称を用いる。
- ⑥ 「阿緞」は「阿緞」の誤植と推測される。
- ⑦ 本文では「百歩蛇」と表記されている。
- ⑧ ここには、第 21 班が「京都」と呼んだ台南が含まれておらず、その点奇妙に思われるが、実際には台南や台中も指定遊覧地となっていた（曾山、2003：109）。
- ⑨ （森、2010：78）にも同様の指摘がある。